

各地からのたより

三六災害五十年

シンポジウム開催される

〔南信署〕平成二十三年六月十九日に長野県飯田市（飯田文化会館）で「三六災害五十年シンポジウム（三六災害から学ぶこと）地域の防災力向上をめざして」が開催されました。



シンポジウムの様子

三六災害とは、昭和三十六年六月の梅雨前線豪雨により伊那谷全域で山腹崩壊や河川が決壊し、死者・行方不明者百三十六名を出した災害です。この災害を風化させず教訓として継承し、国・自治体・地域社会、住民が自らの課題として防災に関する知識を深め、防災意識を共有して自然災害に備えた地域づくりを

目指すことを目的に行われたものです。当日はサイドイベントとしてシンポジウム開催前に、南信州広域連合から下伊那郡大鹿村の災害を題材にした演劇が上演されるとともに、災害当時の記録映像も上映され、改めて災害規模の大きさが、会場に訪れた住民の方々に伝わっていました。

式典では主催者を代表し北澤秋司（信州大学名誉教授）実行委員長からの挨拶や、阿部守一長野県知事をはじめ来賓から防災について挨拶を受け式典を終了しました。その後「三六災害と伊那谷く地形・地質と災害との関連から」をテーマにした基調講演や、伊那谷の今後における防災に取り組む上で何が必要なのかを、住民代表や防災担当者等がパネラーとなりパネルディスカッションが行わ

れ、最後に当署の竹内署長の閉会の言葉で幕を閉じました。

当日会場内では「防災技術」や「地域防災活動」「三六災害当時」に関するパネル展示も行われ、南信森林管理署と伊那谷総合治山事業所合同で、国際森林年のPRと併せ治山事業についてのパネル展示を行いました。パネルと併せ「保安林のしおり」や「管内概要」等のパンフレットも用意しましたが、来場者の関心は高くアツと言う間に無くなり、改めて治山に対する関心度が高いことを実感しました。

多くの人々の協力を得て

八島ヶ原湿原の防鹿柵完成

〔南信署〕平成二十三年六月二十四日、国指定天然記念物八島ヶ原湿原（下諏訪町、諏訪市）の外周およそ四キロメートルに及ぶ防鹿柵が完成しました。

霧ヶ峰地域におけるニホンジカの被害が深刻となったことから、林野庁のモデル事業を活用し、霧ヶ峰自然環境保全協議会が主体となり、昨年度の八月二十一日に事業が開始されました。

設置にあたっては、協議会加盟機関（長野県諏訪地方事務所・南信森林管理署・諏訪市役所等）が中心となりましたが、多くのボランティアの方々も参加したことは、被害に対する関心の高さの表れであると感じました。



防鹿柵の設置風景

昨年度は実施日数七日間延べ三百十三名で約二・一キロメートル。今年は約一・八キロメートルを六日間延べ二百九十二名の参加者によって防鹿柵を完成させることができました。

この柵は高さ二メートルほどありますが、シカが飛び越えて来た場合も想定して、柵の内側にコの字型の施設を設置しました。これはシカが柵に沿って移動する習性を利用したもので、柵沿いに移動して袋小路に入ったシカを捕獲または扉から外へ出すという狙いがあります。

八島ヶ原湿原には、霧ヶ峰固有の植物で絶滅危惧種に指定されているキリガミネヒオウギアヤメをはじめ貴重な植物が数多く自生しておりますが、近年、シカによる被害や踏み荒らしに悩まされてきました。

今回の防鹿柵設置により、シカの侵入が防止されることで湿原の保全が図られることとなります。また、この効果を更に維持するため、センサーカメラによる監視や現地パトロール、柵の修繕を実施

国際森林年、治山事業のパネル展示

して、将来にわたり湿原の保全が図られることを期待するところです。

今後においては、防鹿柵等による植物保護に加え、積極的なニホンジカの個体数調整を目的に、委託による捕獲駆除を実施するため、現在、各自自治体及び各猟友会等と交渉を進めています。

遊々の森『多摩市民の森』で 森林教室を実施

〔南信署〕 平成二十三年五月三十一日から六月三十日までの間、富士見町の西岳国有林にある「多摩市民の森」（遊々の森）において、多摩市の小学生（五小）学校延べ四百二十五名を対象に五回の森林教室を実施しました。

この森林教室は歴史が長く、昭和五十七年に多摩市八ヶ岳少年自然の家を利用する小学生を対象に当署主体で開始されました。多摩市小学校では多摩市内を流れる多摩川上流に、首都圏の水源で



児童5名を木に見立てて間伐の説明



初めての伐倒作業に皆興味津々

ある水道水源林があることから、教科過程において森林の水源涵養機能を学んでおり、森林の機能について深い関心を持っています。

今年の森林教室では当署職員から森林の多面的機能の説明、そこから森林の育成（特に間伐）の意義を伝えました。その後当職員等の指導の下、間伐体験を行いました。児童達は代わる代わる鋸を使い、初めての立木の伐倒に苦戦しつつも、徐々にコツをつかみ、受け口がうまく切り取られた時は歓声が上がりました。また、立木の倒れる迫力に圧倒されながら、林業の大変さを体験していました。倒した木も児童達の手で一ふたいに玉切りし、ロープ等を用いて林道沿いへと搬出しました。

間伐後、伐根付近で上方を見上げるよ

う児童達を促すと、樹冠のあったところが開け空が覗いているのを見て、間伐の必要性を実感しているようでした。また、伐採木の樹皮をはぎ、その内側をなめた児童の中には鹿の樹皮はぎ被害の現状を知り、「樹皮の中が甘いなんて驚き。鹿の気持ちかわかる。」と感想を言う人もいました。

開始当初は当署職員が主体で行っていた森林教室ですが、現在では当署支援の下、多摩市八ヶ岳少年自然の家が主体となって活動的な森林体験を実施しており、今後も継続的な行事へと発展することが期待できます。

シリーズ 現場最前線

豊かな森林づくりを目指して

〔南木曾支署須原森林事務所班〕 須原森林事務所は、長野県西部の大桑村須原旧中山道の須原宿にあり、大桑村村内の木曾川右岸殿地区の阿寺国有林と左岸伊奈川国有林のおよそ一七、五〇〇鈔を管轄しています。

管内の森林は多様性に富み、右岸側は阿寺山地の比較的なだらかな地形でヒノキの生育に適しているのに対して、左岸側は中央アルプス空木岳（二、八六四メートル）の山麓を中心に低山帯から高山帯までの標高差約二、〇〇〇以上に及ぶ急峻で変化

の激しい原生的で多様な生態系の森林を形成しています。

当事務所の現場班は三名体制と少人数ですが生産・造林の経験も豊富で、森林保全管理、林道維持及び各種調査業務に従事しており、最近では熊による立木の剥皮被害防止にも取り組んでいます。また、中央アルプスのレクリエーションの森の機能を向上させるため、空木岳や越百山の巡視や歩道整備など多岐にわたる業務を行っています。

この地域は朝晩、夏冬の気候変化も激しく、地形的にも連絡手段が限られてくることから、毎朝のミーティングでは体調確認はもとより当日の作業箇所・内容における段取りや安全確認、万が一の際の連絡場所や機器の再確認をしながら、明るく安全な職場環境で豊かな森林作りに取り組んでいます。



須原森林事務所班の皆さん



黒平山からの展望

森を歩こう

〔愛知所〕 犬山・八曾自然休養林は昭和四十九年三月に設定され、愛知県犬山市の東部、岐阜県境に位置する丘陵性山地で飛騨木曾川国定公園内にあり、面積は

ふう けい き こう
風景紀行
犬山・八曾
自然休養林
 75
 愛知森林管理事務所
 (各署の景勝地等を紹介)



平成の名水「八曾滝」

高き約十八メートルあり、「山伏の滝」とも呼ばれる。木々の生い茂る渓谷に滝の音が響く、

一、二、三、ハルです。都市近郊の自然休養林として、四季を通じて多くの利用者で賑わっています。日本ラインを望む犬山地区は、起伏に富んだ岩石とマツなどの森林が一体となり、優れた景観を呈しています。また、八曾地区は黒平山からの展望や、八曾滝、五段の滝、乙女滝、巖頭洞など変化に富んだ自然景観を呈しています。

〔黒平山〕

八曾山とも呼ばれ標高三二七メートルで当自然休養林の最高峰、三六〇度の眺望が楽しめ、晴天時は御嶽山、乗鞍、白山等を見ることが出来ます。



巖頭洞 (洞窟)

も称され、修験者や、秋葉寺(宗岳寺)の修行の場でもあったといわれています。

また、本滝は、平成二十年六月に、環境省の「平成の名水百選」に選ばれ、モミの木駐車場、亀割駐車場から徒歩で約四十〜五十分のところにあります。

〔巖頭洞 (がんどがま)〕

巖頭洞歩道沿いの両岸に岩壁がそそり立つ一角に自然にできた洞窟があります。この洞窟は昔の籠灯(がんとう)のような形をしており、その昔は野盗が住んでいたとか、穴居生活時代の遺跡とも言われられています。

〔八曾木橋〕

モミの木駐車場から徒歩で約三十分、

五条川に架かる木橋で八曾自然休養林のシンボルとなっています。平成二十二年七月愛知県犬山市周辺に降った豪雨により元々あった木橋が全壊、平成二十三年三月復元しました。

〔所在地〕

愛知県犬山市

◆アクセス(モミの木駐車場まで)

○鉄道利用

名鉄犬山線犬山駅からバス(明治村行) 終点下車。徒歩又はタクシーで。

○自動車利用

高速道路では、中央道「小牧東IC」から県道四九号線を入鹿池方面、入鹿大橋手前を右折。



復元された八曾木橋